慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献
Sub Title	Engels' contribution to Marxist philosophy
Author	牧野, 広義(Makino, Hiroyoshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2021
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.114, No.1 (2021. 4) ,p.27- 49
JaLC DOI	10.14991/001.20210401-0027
Abstract	マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献を本稿では次の3点から論じる。第1に，マルクスの「新しい唯物論」が『ドイツ・イデオロギー』におけるエンゲルスとの協働によって平明に主張された。第2に，エンゲルスは弁証法をヨーロッパ思想の歴史的発展からとらえ，分析的方法やヘーゲル弁証法の意義と限界も位置づけた。第3に，エンゲルスは哲学史を踏まえ，マルクスの認識とも共通する「哲学の根本問題」を明快に定式化した。 This paper elucidates three aspects of Engels' contribution to Marxist philosophy. First, Marx could clearly describe his new practical materialism in The German Ideology, because of his collaboration with Engels. Second, Engels employed the historical perspective to explain his materialist dialectics, illuminating the significations and limitations of the analytical method and Hegel's idealistic dialectics. Third, Engels asserted that the historical conflicts between materialism and idealism concerning the relations between matter and spirit constitute the fundamental problem of philosophy.
Notes	特集：マルクス主義におけるエンゲルスの貢献
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20210401-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」114 巻 1 号（2021 年 4 月）

マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献

牧野広義 *

Engels' Contribution to Marxist Philosophy

Hiroyoshi Makino *

Abstract: This paper elucidates three aspects of Engels' contribution to Marxist philosophy. First, Marx could clearly describe his new practical materialism in *The German Ideology*, because of his collaboration with Engels. Second, Engels employed the historical perspective to explain his materialist dialectics, illuminating the significations and limitations of the analytical method and Hegel's idealistic dialectics. Third, Engels asserted that the historical conflicts between materialism and idealism concerning the relations between matter and spirit constitute the fundamental problem of philosophy.

Key words: practical understanding of the real world, dialectics, materialism, contradiction, fundamental problem of philosophy

JEL Classifications: B14, B40, B41

* 阪南大学名誉教授
Professor Emeritus, Hannan University

はじめに

本稿のテーマは「マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献」である。ここで「マルクス主義哲学」とは，マルクスとエンゲルスによって主張された哲学を言う。両者の共同におけるエンゲルスの貢献を論じたい。

マルクスとエンゲルスとの関係を考える手掛かりは，エンゲルスがマルクスを「第 1 バイオリン」に，自分を「第 2 バイオリン」にたとえたことである[(1)]。第 2 バイオリンは，第 1 バイオリンに先行して「序奏」を奏でたり，第 1 バイオリンの主旋律に対して副旋律を奏でて「ハーモニー」を作ったり，さらに第 2 バイオリンが「独奏」することもある。古典派経済学の批判的研究（「国民経済学批判大綱」『独仏年誌』1844 年）や労働者階級の状態の研究（『イギリスにおける労働者階級の状態』1845 年）では，明らかに「第 2 バイオリン」が先行した。また『ドイツ・イデオロギー』（1845–46 年）や『共産党宣言』（1848 年）では両者のみごとな「ハーモニー」がある。哲学の分野についてはマルクスがまとまった著作を残さなかったのに対して，エンゲルスはマルクスの死後『フォイエルバッハ論』（1888 年）などで哲学の議論を「独奏」した。これらから，小論では哲学の分野に限定して，エンゲルスの貢献を論じたい。

エンゲルスの理論的特徴をとらえる際に参考になるのは，彼が自分の性格やモットーを語った発言である[(2)]。彼は，マルクスの娘のジェニーの質問票に答えて，主な性格を “knowing everything by halves” と言い，モットーを “take it easy” と言った。前者は直訳すれば「何でも知っている，半分だけ」である。これはしばしばエンゲルスの博識と同時に謙虚さを示す言葉として解釈される。エンゲルスの博識は間違いないが，「半分だけ」はエンゲルス自身が自分の知識はマルクスほど厳密ではないことを自覚してのことと思われる。また “take it easy” は「気楽に行こう」という意味であろうが，“easy” は「容易に」という意味にもとれる。多くの人に容易に理解してもらうためには，理論の厳密性よりも核心をついた内容を簡潔に語ることが必要である。ここにエンゲルスの特徴があると言えるであろう。

なお，エンゲルスのこれらの言葉は，1868 年 4 月 2 日のものとされるが，マルクスはそれに先だって 1865 年 3 月上旬に，モットーとして “de omnibus dubitandum”（すべてを疑え），好きなこととして “bookworming”（本を漁ること）と答えている。これを見ても，エンゲルとの違いが分か

---

(1)　エンゲルスの 1884 年 10 月 15 日付ベッカー宛の手紙，Marx / Engels, Werke, Dietz Verla（以下，MEW と略記），Bd. 36, S. 218. 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店（以下，『全集』と略記）第 36 巻 198 頁。

(2)　大村泉・窪俊一・V. フォミチョフ・R. ヘッカー編『ポートレートで読むマルクス——写真帖と告白帖にみるカール・マルクスとその家族——』極東書店，2005 年，原文と邦訳を参照。

る。エンゲルス自身がマルクスの徹底した理論的態度との違いを意識していたであろう。

以上のような視点から，本稿では，フォイエルバッハ批判における現実世界の実践的把握，弁証法の諸要素，および哲学の根本問題と唯物論について，マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献を論じたい。

I 『ドイツ・イデオロギー』「フォイエルバッハ」章でのフォイエルバッハ批判

マルクスとエンゲルスは共同で『ドイツ・イデオロギー』[(3)]を執筆した。その「フォイエルバッハ」章は彼らの協力関係がよく分かるものとなっている。とりわけ，フォイエルバッハに対する批判の個所は，その数ヶ月前に書かれたマルクスの「フォイエルバッハにかんするテーゼ（ad Feuerbach）」[(4)]（以下,「テーゼ」と略記）があるため，これとの比較によってエンゲルスの貢献がうかがえるものとなっている。そのいくつかの特徴を検討したい。

(1) 世界の変革の哲学

マルクスは「第 11 テーゼ」において次のように述べた。「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したにすぎない。肝心なことは世界を変革する（verändern）ことである」（MEGA, VI–3, 21. 113 頁）。これと同じ思想が「フォイエルバッハ」章では次のように表現される。「それゆえ現実において，そして実践的唯物論者すなわち共産主義者たちにとって重要なことは，現存の世界に革命をおこす（revolutionieren）こと，眼前の事物を実践的に攻撃し（angreifen），変革する（verändern）ことである」（MEGA, I–5, 19. 31 頁）。

ここではまず，マルクスの言う「新しい唯物論」（第 10 テーゼ）が,「実践的唯物論者すなわち共産主義者たち」と言い換えられる。この言い換えは，以下でも見るように,「テーゼ」における現実の実践論的把握，およびマルクスとエンゲルスが共に到達した共産主義者という立場を踏まえれば，十分に理解できるものである。その立場から彼らは「現存の世界の革命」,「眼前の事物を実践的に攻撃し，変革すること」を主張するのである。マルクスの「新しい唯物論」における「世界の変革」の哲学は，エンゲルスとの共同作業の中で,「実践的唯物論者すなわち共産主義者たち」の「革命」と「変革」の哲学として表現されたのである。

---

(3) Marx / Engels Gesamtausgabe, De Gruyter, Akademie Forschung（以下，MEGA と略記），I. Abt., Bd. 5. 邦訳，マルクス／エンゲルス『[新訳] ドイツ・イデオロギー』服部文男監訳，新日本出版社。引用では原書の部門・巻（I–5）・頁（S.）および邦訳の頁を記す。なお，引用にあたって邦訳は適宜変更している。以下，他の著作についても同様。

(4) MEGA, VI–3, 19ff. 邦訳，前掲『[新訳] ドイツ・イデオロギー』所収。引用では原書の略号と部門・巻・頁，および邦訳の頁を記す。

(2) 現実世界の実践的把握

マルクスは「第 1 テーゼ」で次のように述べた。

「これまでのすべての唯物論（フォイエルバッハのそれを含めて）の主要な欠陥は，対象，現実，感性が，客体または観察（Anschauung）の形式のもとでだけとらえられ，感性的・人間的な活動，実践として主体的にとらえられないことにある。……フォイエルバッハは，感性的な——思想的客体から現実に区別された客体を欲する。しかし，彼は，人間的な活動そのものを対象的な活動としてとらえていない。……したがって，彼は『革命的な』活動，『実践的に批判的な』活動の意義を把握しない」（MEGA, VI–3, 19. 109 頁）。

この表現は難解である。そのため，研究者の間での論争も巻き起こった。それに対して，「フォイエルバッハ」章では以下のような明快な表現がされている。

「フォイエルバッハの感性的世界の『把握』は，一方では，それの単なる観察（Anschauung）に，他方では，単なる感覚に限られており，『現実的で，歴史的な人間』の代わりに『人間というもの』をおく」（MEGA, I–5, 19. 31 頁）。

「第 1 テーゼ」では「対象，現実，感性」というフォイエルバッハに由来する言葉が使われていた。フォイエルバッハは，「その現実性においての，また現実的なものとしての現実的なものは，感覚の対象としての現実的なものであり，感性的なものである[(5)]」と述べた。「第 1 テーゼ」における「対象，現実，感性」とは，感性に与えられる現実の対象である。この表現が，「フォイエルバッハ」章では「感性的世界」と表現される。それは感性に与えられる現実の世界であることを明瞭に表現するものである。そして，フォイエルバッハにおいては，感性的世界が「観察」や「感覚」の対象とされ，感性的世界に関わる人間も「現実的で，歴史的な人間」ではなく，抽象的な「人間というもの」にすぎない，と批判されるのである。

また，「フォイエルバッハ」章ではフォイエルバッハが次のようにも批判される。

「フォイエルバッハは，自分をとりまく感性的世界が，直接にずっと前から与えられた常に同じ事物ではなく，産業と社会状態の産物であるということを見ない」（ibid. 同）。

これは，「第 1 テーゼ」の言う「感性的・人間的な活動，実践として主体的にとらえる」という主張についての明快な説明になっている。つまり，それは，感性的世界を「産業と社会状態の産物」としてとらえることである。しかも，感性的世界が労働や社会的実践の「産物」ということは，労働や社会的実践の結果だけを言うのではない。「フォイエルバッハ」章では次のようにも表現される。

「まったくこの活動，この絶え間ない感性的な労働と創造，この生産が，いま存在するような感性的世界全体の基礎である」（MEGA, I–5, 22. 32 頁欄外）。

「フォイエルバッハは，感性的世界を，それをつくっている諸個人の生きた感性的活動の全体とし

---

(5) フォイエルバッハ『将来の哲学の根本命題』松村一人・和田楽訳，岩波文庫，32 節。

て把握することにはけっして到達しない」(MEGA, I–5, 25, 33 頁)。

つまり，労働と社会的実践という絶え間ない活動が，現実の世界をつくっているのである。またここでの表現は,「第 9 テーゼ」における「観察する唯物論，すなわち感性を実践的な活動としてとらえない唯物論」(MEGA, VI–3, 19. 113 頁）への批判に対応する。つまり,「感性的世界」を「実践的な活動としてとらえること」が，マルクスとエンゲルスの現実把握の核心である。この思想は「現実世界の実践的把握」と表現してよいであろう。

ここからさらに，フォイエルバッハが次のように批判される。

「共産主義的唯物論者が産業ならびに社会的編成の変革の必然性と同時にその条件を見るまさにそのところで，彼は観念論に逆戻りせざるをえない」(MEGA, I–5, 19. 34 頁)。

この言葉は,「第 1 テーゼ」の言う「彼は『革命的な』活動,『実践的に批判的な』活動の意義を把握しない」というフォイエルバッハ批判に対応する。「産業ならびに社会的編成の変革」とは，まさに「革命的実践」である。それは，理論的な批判にとどまらず,「実践的に批判的な」活動なのである。

以上のようにして，マルクスの「第 1 テーゼ」の思想が，マルクスとエンゲルスとの共同による「フォイエルバッハ」章で，厳密かつ平明に表現されたのである。表現の平明さにおいて，特にエンゲルスの貢献が大きいと思われる。

続いて,「フォイエルバッハ」章ではフォイエルバッハは次のように批判される。

「フォイエルバッハが唯物論である限りでは，歴史は彼のところには現れない。また彼が歴史を考慮に入れる限りでは，彼は唯物論者ではない」(MEGA, I–5, 26. 34–35 頁)。

こうして，現実世界を実践として把握するマルクス・エンゲルスの唯物論と，人間と現実社会の感性的な「観察」にとどまるフォイエルバッハとの，社会哲学における唯物論と観念論との対立が明瞭になるのである。

(3) フォイエルバッハ批判から「本源的な歴史的関係」の 4 契機へ

「フォイエルバッハ」章では，以上のフォイエルバッハ批判からすぐに続けて次のように述べられる。

「われわれは，無前提なドイツ人のもとで，すべての人間存在の，それゆえまたすべての歴史の第一の前提，すなわち人間は “歴史をつくる” ことができるためには生きていなければならないという前提を確認することから始めなければならない。しかし，生きるために必要なのは，とりわけ飲食，住居，衣服，そしてその他のいくつかのものである」(MEGA, I–5, 26. 35 頁)。

ここから「第一の歴史的行為」は,「これらの欲求を充足するための手段の産出，物質的生活そのものの生産である」と述べられる。そして,「第二の歴史的行為」は「充足された欲求そのもの，充足の行為，およびすでに獲得された充足の用具が，新しい欲求をもたらすということである」(MEGA,

I–5, 27. 35–36 頁）とされる。そして「第三の関係」は「自分自身の生命を日々新たにつくる人間たちが，他の人間をつくり繁殖し始めるということである――夫と妻との関係，両親と子どもとの関係，家族」（ibid. 36 頁）とされる。さらに「第四の歴史的関係」は人間の社会的関係の形成である。「労働における自己の生命も，生殖における他人の生命も，その生産は二重の関係として――一方では自然的な関係として，他方では社会的な関係として現れる」（MEGA, I–5, 28. 37 頁）。

こうして，社会と歴史の唯物論的把握の基礎となる「本源的な歴史的関係」の 4 契機がまとめられる。つまり，フォイエルバッハの歴史における観念論への批判が，直接に唯物論的歴史観の議論につながるのである。

このようなマルクスとエンゲルスの共同作業によって，「フォイエルバッハにかんするテーゼ」における難解な思想がより平易に表現されるとともに，フォイエルバッハへの批判が直接に唯物論的歴史観の議論に接続されたのである。この共同作業において，マルクスの独創性とともにエンゲルスの貢献を見なければならないであろう。

(4)　エンゲルスによる「テーゼ」の校訂と『フォイエルバッハ論』への収録

エンゲルスの貢献の一つとして，マルクスの「フォイエルバッハにかんするテーゼ」を校訂のうえで『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』[(6)]（1888 年，略称『フォイエルバッハ論』）の「付録」として公表した点があげられる。これによって，とりわけ「第 11 テーゼ」がマルクスの思想を代表する言葉として広く知られることになった。しかし，エンゲルの校訂は[(7)]，表現を分かりやすくしようとするあまり，マルクスの思想を十分に伝えていない個所がある。

その一つは，「第 3 テーゼ」において，環境と教育が人間を決定するという「唯物論的な学説」の例として，エンゲルスは「(たとえば，ロバート・オーエンの場合)」という言葉を追加したことである。しかし，マルクスは『聖家族』[(8)]（1845 年）の「フランス唯物論に対する批判的戦闘」の中で，エルヴェシウス『人間論』（1772 年）を取り上げている（MEW, Bd. 2, S. 137.『全集』第 2 巻 135 頁）。そしてマルクスは，エルヴェシウスからベンサムへ，さらにオーエンへという影響を指摘したのである。「第 3 テーゼ」における「教育者自身が教育されなければならない」という言葉の意味を理解するためにも，エルヴェシウスが人間を教育する「教師」として，すべての事物，統治形態，習俗，社会的地位，貧富の状態，社交界，友人，読書，愛人をあげたことを想起する必要がある。また，ロバート・オーエンは偉大な実践家であり，マルクスが尊敬していた人物である。

そして「第 3 テーゼ」において，マルクスは「環境の変化と人間的な活動または自己変革との合

---

(6)　MEW, Bd. 21, S.269ff. 邦訳エンゲルス『フォイエルバッハ論』森宏一訳，新日本出版社。引用では原書と邦訳の頁を記す。

(7)　MEW, Bd. 3, S. 533ff. 邦訳は前掲『［新訳］ドイツ・イデオロギー』109 頁以下。

(8)　MEW, Bd. 2, S. 6ff. 邦訳『全集』第 2 巻 4 頁以下。引用では原書と邦訳の頁を記す。

致は，ただ革命的な実践（revolutionäre Praxis）としてだけとらえることができ，合理的に理解することができる」（MEGA, I–5, 6. 110–111 頁）と述べた。この命題の中の「革命的な実践」を，エンゲルスは「変革的な実践（umwälzende Praxis）」に変更した。しかし，マルクスは「革命的な実践」に下線を引いて強調して，人間が社会革命や産業革命など，「革命的」と言えるほどの根本的な「実践」が人間自身を変えることを主張しているのである。

さらに「第 11 テーゼ」は上記のように，「世界の解釈」を述べる文と「世界の変革」を主張する文とから成る。エンゲルスはこの 2 つの文の間に「しかし」を挿入した。だが，「しかし」が入ることによって，「世界の解釈」と「世界の変革」が対立的にとらえられる可能性が出てくる。実際，「世界の解釈ではなく，世界の変革」という言い方がされることがある。だが，マルクスは「世界の解釈」だけにとどまることを批判しているのであって，「世界の解釈」を否定しているわけではない。そのうえで「世界の変革」を肝心なこととして強調しているのである。

また，エンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』の「フォイエルバッハ」章の草稿は公表しなかった。その理由として彼は，『フォイエルバッハ論』の「まえがき」の中で，その草稿は「未完成」であり，「できあがっている部分は唯物論的歴史観を説明したものであるが，その説明は経済史についての当時のわれわれの知識がまだどれほど不完全であったかを証明しているにすぎない」（MEW, Bd. 21, S. 264. 9 頁）と述べている。しかし，フォイエルバッハへの批判や唯物論的歴史観の基本の部分だけでも公表されていれば，その後の「テーゼ」や唯物論的歴史観への理解を促進したと思われる。

II　弁証法の歴史的展開と根本思想

マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献の第二は，弁証法の研究である。それは，『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』（1878 年，略称『反デューリング論』）とその抜粋と補筆による『空想から科学への社会主義の発展』[(9)]（1880 年，略称『空想から科学へ』），『フォイエルバッハ論』（1888 年），および『自然の弁証法』[(10)]に見られる。これらからエンゲルスの弁証法研究の特徴を見ておきたい。

(1)　弁証法の歴史的展開

エンゲルスの弁証法研究の第一の特徴は，弁証法を人間の思考の歴史的発展の中でとらえたことである。彼は『空想から科学へ』で，ヘーゲルの弁証法について述べる際にも「ヘーゲルの最大の功績は，思考の最高の形式としての弁証法をふたたび取り上げたことである」（MEW, Bd. 19, S. 202. 47 頁）と言う。ここで「ふたたび」というのは，弁証法が古代ギリシアで生まれたからである。

---

(9)　MEW, Bd. 19, S. 176ff. 邦訳エンゲルス『空想から科学へ』石田精一訳，新日本出版社。引用では原書と邦訳の頁を記す。

(10)　MEW, Bd. 20, S. 305ff. 邦訳『全集』第 20 巻 337 頁以下。引用では原書と邦訳の頁を記す。

エンゲルスは,「古代ギリシアの哲学者はみな，生まれながらの天成の弁証法家であった」(ibid. 同）と言う。その弁証法によれば,「まずわれわれの前に現れるのは，連関と相互作用が無限に絡み合った姿であり，その無限の絡み合いの中では，どんなものも，もとのままのもの，もとのままのところ，もとのままの状態にとどまっているものはなく，すべてのものは運動し，変化し，生成し，消滅している」(ibid. 48 頁)。エンゲルスは，これは「本源的で，素朴な，しかし事柄の本質上正しい世界観」であると言う。その代表は,「万物は流転する」と述べたヘラクレイトスである。しかし，このように全体の姿を生成・消滅でとらえるだけでは十分ではない。「個々の事物を知らない限り，全体の姿もわれわれにとって明らかではない」(ibid. 同)。

そこで，近代自然科学では「自然をその個々の部分に分解すること，種々の自然過程と自然対象を一定の部類に分けること，生物体の内部をその多様な解剖学的形態にしたがって研究すること」(S. 203. 49 頁）が必要になった。それは，自然を認識するうえでの「巨大な進歩の根本条件であった」。近代自然科学の発展にとって，このような分解・分類・解剖などを基本とする「分析的方法」が重要な役割を果たしたのである。

しかし，エンゲルスはこの分析的方法は,「自然物や自然過程を個々ばらばらにして，大きな全体的連関の外でとらえる習慣，したがってそれらを運動しているものとしてではなく，静止しているものとして，本質的に変化するものとしてではなく，固定不変のものとして，生きているものとしてではなく，死んだものとしてとらえる習慣を残した」(ibid. 50 頁）と言う。

このような思考方法やそれと結びついた世界観は，一般に「機械論的世界観」と呼ばれる。エンゲルスは「この見方〔反弁証法〕が，自然科学から哲学に移されたことによって，それは最近数世紀に特有な偏狭さ，すなわち形而上学的な考え方を作り出した」(ibid. 同）と言う（ここでエンゲルスは，弁証法的でない思考方法〔反弁証法〕を「形而上学」と呼ぶ。この表現については後に検討したい)。この反弁証法的な思考の特徴は「個々の物にとらわれてその連関を忘れ，その存在にとらわれてその生成と消滅を忘れ，静止にとらわれて運動を忘れるからであり，木を見て森を見ない」(S. 201. 51 頁）のである。しかしながら，ダーウィンの進化論をはじめとした自然科学の発展は，反弁証法的思考を乗り越えて，弁証法の正しさを証明したのである。その意味で，エンゲルスは「自然は弁証法の試金石である」(S. 205. 52 頁）と言う。

だが，ダーウィンの進化論が登場する半世紀前に，すでにヘーゲルによって弁証法の復活が行われていた。ヘーゲル哲学においては,「自然的，歴史的，および精神的世界全体が一つの過程として，すなわち，不断に運動し，変化し，改造され，発展しているものとしてとらえられ，叙述され，そして，この運動と発展のうちにある内的な連関を指摘する試みがなされた」(S. 206. 54 頁)。しかしヘーゲルは観念論者であった。ヘーゲルによれば，自然や社会の事物の弁証法的な運動は，それ以前に存在する「理念」の現実化されたものにすぎないとされる。

このようなヘーゲル哲学は，それ自身のうちに矛盾を含んでいるとエンゲルスは言う。この論点

は『フォイエルバッハ論』において明瞭に論じられている。ヘーゲルの弁証法から導き出される弁証法的哲学によれば，すべての歴史的状態は，低いものから高いものへと進んでいく発展途上における経過的な段階にすぎない。したがって，この弁証法的哲学は，「究極的な真理」や「人類の絶対的状態」という思想をすべて解体してしまう。「生成と消滅の不断の過程，低いものから高いものへのかぎりない上昇の過程のほかには，なにも存在しない」(MEW, Bd. 21, S. 267. 17 頁)。これがヘーゲル弁証法からの必然的な帰結である。ところが，ヘーゲルの哲学体系では，彼が弁証法を論じた『論理学』の最後に「絶対的理念」が登場する。これが絶対的真理であって，この真理に基づいて，神が世界を創造するように，理念が「外化」して，自然や精神の世界が「自然哲学」や「精神哲学」として論じられる。「ヘーゲル哲学の教条的内容の全体が，絶対的真理だと宣言されることになって，あらゆる教条的なものを解体するところの，彼の弁証法的方法と矛盾することになる」(S. 268. 19 頁)。つまり，弁証法的方法と哲学体系とが矛盾する。ここから，ヘーゲル哲学において，弁証法という「革命的側面」は，それを覆って広がる「保守的な側面」のもとで窒息させられる，とエンゲルスは言う。

このような観念論的な弁証法を克服して，唯物論的な弁証法を提唱したのがマルクスとエンゲルスである。

以上のように，古代ギリシアの弁証法 → 近代科学の分析的方法 → 機械論的世界観 → ヘーゲルの観念論的弁証法 → マルクスとエンゲルスの唯物論的弁証法というように，ヨーロッパの思考の歴史的発展の中で弁証法をとらえたことはエンゲルスの重要な功績である。この点で，“弁証法か反弁証法（形而上学）か” という対立だけで弁証法を主張することはエンゲルスの本来の思想ではない。エンゲルスの弁証法には，近代科学の分析的方法およびヘーゲル弁証法の意義と限界が，明確に位置づけられているのである。

(2)　自然の弁証法について

近代の弁証法は，ヘーゲルが機械論的世界観を克服するための論理として展開したものである。ヘーゲル弁証法の形成においては，人間精神の歴史的発展，宗教・芸術・哲学の歴史，古典派経済学，生命をもつ有機的自然，家族・市民社会・国家などの研究が重要な意味をもつ。ヘーゲルは弁証法を『哲学的諸学問のエンチュクロペディ』(1817 年，略称『エンチュクロペディ』) における「論理学」・「自然哲学」・「精神哲学」という体系で提示した。ここで弁証法は，主に人間の思考の発展，社会と人間精神の歴史的発展の領域において主張された。「自然哲学」は力学・物理学・有機的自然学の階層的体系として展開されたが，ヘーゲルにおいて生物進化論はない。ヘーゲルの観念論的弁証法を批判し克服したマルクスの弁証法は，彼の経済学批判と密接に結びついていた。こうして，近代的弁証法の誕生と展開は主に人間の社会と歴史の領域において行われたのである。

それに対して，エンゲルスは自然の弁証法を重視した。彼によれば，近代自然科学の発展が分析的

方法の有効性を証明することによって，反弁証法的な思考と世界観を広めたのである。そこで，自然にも弁証法が貫かれていることを明らかにすることによって，反弁証法を克服するとともに，自然・社会・人間の全体を貫く弁証法が把握され，弁証法的世界観を確立することができると考えた。その意味で彼は「自然は弁証法の試金石である」,「自然は弁証法の検証である」と言ったのである。

エンゲルスは近代自然科学における「3 つの大発見」を重視した。第 1 は細胞の発見である。これによって生物の有機体がその連関と発展においてとらえられる。第 2 はエネルギー転化の法則である。力学的エネルギー・熱エネルギー・電気エネルギーなどが，その形態の変化と連関においてとらえられる。第 3 はダーウィンの進化論である。これによって生命の発展（種の進化）が明確にとらえられた。こうして，近代の自然科学そのものが弁証法的な世界観を示しているのである。

また,『自然の弁証法』に収められた諸論文のうち,「サルが人間になるにあたっての労働の役割」が注目される。エンゲルスは，人類への進化において直立二足歩行をもたらした「前提」として，手を使った労働を重視し,「労働が人間そのものを創造した」（MEW, Bd. 20, S. 444.『全集』第 20 巻 482 頁）と主張した。この議論はその後の人類進化学に貢献するとともに，猿人化石の発見などによって実証された。また彼は，人間が自然を支配することによって森林破壊などを行うならば,「自然は人間に復讐する」（S. 452. 491 頁）と述べた。これは現代の環境破壊への警告にもなっている。

(3)　弁証法の諸法則について

エンゲルスは,『自然の弁証法』の中で弁証法の諸法則を二通りの仕方で定式化した。

第 1 の定式は,「全体的計画の素描」（MEW 編者による表題）ないし「1878 年の計画」（MEGA 編者による表題）という草稿の中にあるものである。ここでは次のように記されている。

「全体的連関の科学としての弁証法。主要法則は以下のとおり。量と質の転化。――両極的対立物の相互浸透と，極端にまでおし進められたときの相互への転化。――矛盾による発展あるいは否定の否定。――発展の螺旋形式」（MEW, Bd. 20, S.307.『全集』第 20 巻 339 頁）。

この定式の特徴は,「主要法則」の一つとして「矛盾による発展または否定の否定」が明確に述べられていることである。「矛盾」の重視はヘーゲルやマルクスの弁証法とも一致する。ヘーゲルは『大論理学』(11) において「矛盾はすべての運動と生命性の根本である」（中巻，78 頁）と述べ，マルクスは『資本論』第 1 巻(12) で「すべての弁証法の噴出源であるヘーゲル的矛盾」（MEW, Bd. 23, S. 623. 第 4 分冊 1026 頁）と述べた。また「否定の否定」とは，矛盾の現れた「否定」状態がその矛盾を解決しようとする運動によって，さらに「否定」されてより高次の段階に発展することである。このことが「矛盾による発展または否定の否定」という表現によって明確になるのである。

（11）ヘーゲル『大論理学』武市健人訳，岩波書店。引用では巻と頁を記す。

（12）MEW, Bd. 23. 邦訳マルクス『資本論』資本論翻訳委員会訳，新日本出版社，新書版。引用では原書の頁と邦訳の分冊と頁を記す。

第 2 の定式は,「弁証法」というエンゲルス自身が付けた表題の草稿である。ここでは次のように記されている。

「自然および人間社会の歴史から弁証法の諸法則は抽出されるのである。これらの法則は，これらの局面での歴史的発展および思考そのものの最も普遍的な法則にほかならない。しかも主要には次の三法則に帰着する。

量から質への転化，またその逆の転化の法則

対立物の相互浸透の法則

否定の否定の法則

これら三法則はすべて，ヘーゲルによって彼の観念論的な流儀で単に思考法則として展開されている。すなわち，第一の法則は『論理学』の第一部の有論の中にあり，第二の法則は彼の『論理学』のとりわけ最も重要な第二部の本質論の全体を占めている。最後に第三の法則は全体系の構築のための根本原理としての役割を演じている」(MEW, Bd. 20, S. 348.『全集』第 20 巻 379 頁)。

この定式の特徴は，ヘーゲル論理学に即して弁証法の諸法則が述べられていることである。その際，第二の法則はヘーゲル論理学の本質論の全体に対応し，第三の法則はヘーゲル論理学の全体に対応するとされている。そのために，第 1 の定式の「計画」の中にあった「矛盾による発展」がなくなっている。つまり「矛盾」はヘーゲル論理学の中の本質論における一つのカテゴリーであるが，第 2 の定式では本質論の全体を「対立物の相互浸透」ととらえたために,「矛盾」がその中に埋もれてしまっているのである。また第 2 の定式では，ヘーゲル論理学第三部の「概念論」に対応する法則がない。

エンゲルスの後の「弁証法的唯物論」の教科書などで継承されたのは，第 2 の定式である「弁証法の三法則」であった。そのために，それらの教科書は重大な弱点を含むことになった。それは第一に「矛盾による発展」を軽視したことである。第二に「矛盾による発展」と「否定の否定」との密接な関連をとらえなかったことである。そのために「否定の否定」が「発展の螺旋形式」と同じようにとらえられることにもなった。第三に，ヘーゲル論理学の概念の固有の論理である「主体」の発展の論理,「主体－客体」関係の論理,「自由」の論理などがヘーゲル論理学から批判的に継承されなかったことである。

今日の課題は，エンゲルスが述べたように,「自然および人間社会の歴史」から弁証法の諸法則を抽出することを現代科学の成果に基づいて行うとともに，ヘーゲル論理学のいっそう立ち入った研究とその批判的継承を行うことである。

(4) 資本主義の根本矛盾とその発展

エンゲルスがマルクスと同様に「矛盾による発展」を重視したことは，彼が『空想から科学へ』において「資本主義の根本矛盾」とその発展から社会主義社会への変革を論じたことにも示されてい

る。このことを確認しておきたい。

エンゲルスによれば，大量の労働者の形成と資本家による生産手段の独占が資本主義を形成した。そこでは，生産物は生産した労働者のものではなく，資本家のものとなる。多数の労働者の協働によって社会的に生産された生産物は，資本家の取得となる。このように，社会的生産にもかかわらず，その成果は資本家によって私的に取得される。そこには，マルクスによって明らかにされたように，「労働者の搾取」による資本家の「剰余価値」の取得がある。エンゲルスは，このような「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」が「資本主義の根本矛盾」をなすと言う。

こうして，「一方では資本家の手に集積された生産手段と，他方では自分の労働力以外には何も持ち物がないようにされた生産者との間の分離が完了した。社会的生産と資本主義的取得との矛盾が，プロレタリアートとブルジョアジーの対立として，明るみに出る」（MEW, Bd. 19, S. 214. 70 頁）とされる。また，資本家は個々の工場内ではきわめて組織的に生産するにもかかわらず，社会全体では相互に競争し合う商品生産を行って「生産の無政府状態」が生じる。ここにもエンゲルスは，「資本主義の根本矛盾」の現れを見る。こうして，「プロレタリアートとブルジョアジーとの対立」と，「個々の工場での生産の組織化と社会における生産の無政府性」とが，「資本主義の根本矛盾」の「2 つの現象形態」（S. 216. 74 頁）であるとされる。

ここで，根本矛盾と現象形態とは「本質は現象する」という弁証法的な関係をなす。「本質」と「現象」はエンゲルスが重視したヘーゲル論理学の本質論におけるカテゴリーであり，エンゲルスの言う「対立物の相互浸透」をなす。労働者の搾取による「資本主義的取得」はマルクスによって理論的に解明された資本主義の「本質」である。エンゲルスは，「唯物論的歴史観」と「剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露」という 2 つの発見によって「社会主義は科学となった」（S. 209. 61 頁）と言う。このようなマルクスの理論に基づいて，エンゲルスは「社会的生産と資本主義的取得」を「資本主義の根本矛盾」ととらえた。そしてこの矛盾は，より具体的に「プロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立」や「工場内での組織的生産と社会における無政府的生産」として，目に見える姿で現れる。これが「現象形態」である。

そして，エンゲルスは「資本主義の根本矛盾」と，その「2 つの現象形態」である「A　プロレタリアートとブルジョアジーとの対立」と「B　個々の工場での生産の組織化と社会における生産の無政府性」から，さらに進んで「C　資本の蓄積と労働者の貧困の蓄積，恐慌の勃発」，「D　株式会社・トラスト，国家」という矛盾を論じる。

ここからエンゲルスは言う。「恐慌が，ブルジョアジーには現代の生産力をこれ以上管理する能力がないことを暴露したとすれば，大規模な生産施設と交通施設が株式会社やトラストや国有に転化したことは，その目的のためにはブルジョアジーがなくてもよいことを示している」（S. 221. 83 頁）。そこで，資本主義社会の矛盾の解決は，「根本矛盾」を形成する「資本主義的取得」の変革にあることが主張される。「この解決はただ，現代の生産力の社会的本性を実際に承認し，したがって

生産様式，取得様式，交換様式を生産手段の社会的性格と調和させるということのうちにしかありえない」(S. 222. 84 頁)。それは，プロレタリアートによる国家権力掌握のもとで，生産手段を社会的所有に転化することによってのみ可能になる。こうして，「プロレタリアートは，プロレタリアートとしての自分自身を廃棄し，それによってプロレタリアートはすべての階級差別と階級対立を廃棄し，またそれによって国家としての国家を廃棄する」(S. 223. 86 頁)。これがエンゲルスの言う科学的社会主義である。そしてこれは，弁証法における「矛盾による発展」の典型的な事例である。

なお，エンゲルスはここで「否定の否定」は論じていない。しかしマルクスは『資本論』第 1 巻で，小経営における自分の労働の生産物の所有と，その「否定」としての資本主義的生産における他人の生産物の所有，さらに「否定の否定」としての社会主義的生産における個人的所有の再建を論じたのである（MEW, Bd. 23, S. 791. 第 4 分冊 1306 頁)。ここでは資本主義の「矛盾」からの社会主義への発展が「否定の否定」ととらえられるのである。

(5) 弁証法と反弁証法（形而上学）について

エンゲルスは，先にも見たように，反弁証法を「形而上学」と呼んで批判した。しかし，「形而上学」(ラテン語では metaphysica）は，もともとアリストテレスの著作に付けられた書名である。それは「自然学（physica)」の「後に（meta)」置かれた著作である。この「形而上学」は，アリストテレス以来のヨーロッパの哲学史の中で，世界の存在の原理や神や霊魂などを論じる「超（meta）自然学（physica)」という内容をもってきた。

ヘーゲルは『小論理学』「予備概念」の「客観性に対する思想の三つの態度」で，近代哲学におけるカント以前の「古い形而上学」を批判した。その主要な論点は，旧形而上学には弁証法が欠けていることであった。それは世界の事物を固定した不動のものとして独断的にとらえたのである。それに対して，ヘーゲルは弁証法的な『論理学』によって形而上学を再建しようとした。つまり，ヘーゲルは弁証法的な「形而上学」を主張したのである。

この点で，エンゲルスのように，反弁証法を「形而上学」と呼ぶことは，哲学史の理解においてもヘーゲル哲学の理解においても適切ではない。エンゲルスは，ヘーゲルの『小論理学』の議論から，「旧形而上学」が反弁証法であることをとらえて，反弁証法を「形而上学」と呼んだ。しかしこの場合も，逆は必ずしも真ではない。

マルクスは「形而上学」の哲学史的意味を踏まえている。マルクスはエンゲルスとの共著として出版した『聖家族』に収録した「フランス唯物論にたいする批判的戦闘」において，フランス唯物論を 17 世紀の「形而上学」に対する批判としてとらえている。彼は次のように述べている。

「18 世紀のフランスの啓蒙思想，とくにフランス唯物論は，現存の政治制度ならびに現存の宗教と神学にたいする闘争であっただけでなく，同じく，17 世紀の形而上学とすべての形而上学にたいする，ことにデカルト，マルブランシュ，スピノザ，およびライプニッツの形而上学にたいする公

然たる闘争でもあった」(MEW, Bd. 2, S. 132.『全集』第 2 巻 130 頁)。

マルクスはここで「形而上学」という言葉を「存在を存在として研究する学問」であり，神・霊魂・世界を論じる学問という，アリストテレス以来の本来の意味で使っている。近代の「形而上学」の多くは観念論として展開された。この意味で「形而上学」は思弁的な観念論という意味をもつのである。

以上のことから，反弁証法を「形而上学」と呼ぶことは適切ではない。エンゲルスが「形而上学」と呼ぶ反弁証法は，世界の事物を，バラバラな部分からなり，外的な力によって運動し，同じ運動をくりかえす「機械」と見る「機械論」である。

エンゲルスは『フォイエルバッハ論』の第 2 章で,「前世紀〔18 世紀〕の唯物論は大部分が機械論的（mechanisch）であった」(MEW, Bd. 21, S. 278. 40 頁）と述べて，動物や人間を「機械」ととらえる「動物機械論」や「人間機械論」を批判している。この意味で，エンゲルスが「形而上学」と呼んだ思考方法は,「機械論」と呼ぶことが適切であると思われる。

III　哲学の根本問題の定式

さらに，エンゲルスのマルクス主義哲学への貢献として,「哲学の根本問題」の定式化があげられる。しかし，この定式化は，デンマークのシュタルケがドイツで出版した『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』(1885 年）への書評として雑誌『ノイエ・ツァイト〔新時代〕』に発表されたものの中にあったこともあり，かなり簡潔に述べられている。そのため，その定式の哲学的な意義が十分にはとらえられていない[(13)]。むしろ「哲学の根本問題」が独断的に論じられたかのようにとらえられたり,「唯物論と観念論との対立」が図式的に理解されたりすることもあった。そのため，エンゲルスの提起の意味を改めて考えたい。

(1)　エンゲルスによる哲学の根本問題の定式

エンゲルスは『フォイエルバッハ論』第 2 章の冒頭で「哲学の根本問題」を定式化して次のように言う。

「すべての哲学の，とくに近代の哲学の，大きな根本問題は，思考と存在との関係にかんする問題である」(MEW, Bd. 21, S. 274. 30 頁)。

---

(13) 田畑稔「エンゲルスによる『哲学の根本問題』導入の経緯」(田畑稔『マルクスと哲学』新泉社，2004, 所収）は，従来は日本で紹介されることのなかったシュタルケの著作を取り上げて，エンゲルスはシュタルケによって示唆されて「哲学の根本問題」という視点を導入したという解釈を行った。しかし田畑氏は，エンゲルスとヘーゲルとの関係やエンゲルスとマルクスとの関係を論じていないため，エンゲルスの定式を十分に評価していない。

この問題は,「存在に対する思考の関係，自然に対する精神の関係という問題，すなわち哲学全体の最高の問題」(S. 275. 32 頁）とも言い換えられる。そしてエンゲルスは,「この問題にどう答えるかによって，哲学者たちは二つの大きな陣営に分裂した。自然に対する精神の根源性を主張し，それゆえなんらかの仕方の世界創造を認める人々は……観念論の陣営を形成した。自然を根源的なものと見た人々は，唯物論のさまざまな学派に属する」(ibid. 同）と言う。

エンゲルスは，この問題の起源として，古代人が死とは肉体から霊魂が抜け出してしまうことだと考えて，肉体は滅んでも霊魂は不死だと信じたことや，原始宗教では，自然の諸力を擬人化して，それを神々として崇拝したこと，そしてその後，しだいに超自然的な神が想定されて，唯一神による世界創造が主張されたことを述べている。さらに，中世のスコラ哲学では，神が世界を創造したのか，それとも世界は永遠の昔から存在しているのかという対立にもなったと言う。しかし彼は,「この問題が十分な鋭さで提起され，その完全な意義を獲得したのは，ヨーロッパの人間がキリスト教の中世の長い冬眠から覚めたときである」(ibid. 同）と述べて，上記のように「とくに近代哲学の大きな根本問題」であることを確認している。

エンゲルスは，以上のように「哲学の根本問題」の起源を未開人の観念や宗教などから説明し，哲学については中世のスコラ哲学しかあげていない。また「とくに近代哲学の大きな根本問題」についても詳しい説明がない。そのため,「哲学の根本問題」の定式は,「弁証法的唯物論」の教科書ではずいぶん普及したが，その哲学的意味やマルクスの思想との関連などについては十分な理解が得られていないと思われる。そこで以下では，哲学史からの確認と，マルクスの思想との関連の確認をしておきたい。

(2) プラトンの「神々と巨人族との戦い」とヘーゲルの「近代哲学の大問題」

西洋哲学は，古代ギリシアのタレスが「万物の根源は水である」と言ったことから始まるとされる。タレスは，多様な世界を統一的に説明する原理として「万物の根源」を求めて，その答を生きた自然を生かす「水」に求めた。それは，古代ギリシアの神話的世界観から脱却して，合理的な根拠によって世界の根源を探求する「合理的世界観」の始まりであった。タレスの後も「万物の根源」をめぐる論争が続き，その中から「万物の根源」は「アトム」(原子）であるという，デモクリトスらの主張に到達した。これが，古代ギリシアにおける「唯物論」の主張である。

他方で，プラトンは，世界の根源は，すべての物質の模範や原型となる「イデア」であると主張した。イデアは物質の原型であり，感覚では見えず，人間の理性によってのみ理解できる観念的な存在である。プラトンは，このようなイデアをもとにして，制作神（デミウルゴス）が世界を創造したと主張した。これが古代ギリシアにおける「観念論」の代表である。

そしてプラトンは，観念論と唯物論との論争を，古代ギリシア神話にある「神々と巨人族との戦い」にたとえた。(14) この神話は，ギリシアの神々が巨人族を滅ぼして，ギリシア人が支配する世界を

作ったというものである。神々の側である観念論と，巨人族の側の唯物論とが，万物の根源となる「実在」をめぐる戦いをしているというのである。このような「神々と巨人族との戦い」が，古代ギリシアにおける「哲学の根本問題」である。

また，ヘーゲルは，近代哲学は「思考と存在との対立」をもっているとして次のように言う。「近代哲学は中世の立場，すなわち思考されたものと存在する宇宙との差異を対立へともたらし，この対立の解決に専念する。……この思考と存在との統一をもたらし，思考し，概念的に把握する道は二通りある。すなわち，経験が第一の方向であり，思考から，内的なものから出発する哲学が第二の方向である。したがって，哲学はこの対立を解決する二つの主要形態に分離する。すなわち，実在論的哲学と観念的哲学である」[(15)]。

こうして，ヘーゲルは，客観的実在とその経験による認識を主張する「実在論」と，思考や精神の根源性を主張する「観念論」との分離と対立をとらえるのである。

またヘーゲルは，『エンチュクロペディ』第二版，第三版の第 1 部「論理学」（『小論理学』）の「予備概念」で，近代哲学の流れを「客観性に対する思想の三つの態度」としてまとめている。ヘーゲルはそれを，第一の「旧形而上学」（デカルト，スピノザ，ライプニッツら），第二の「経験論と批判哲学」（ロック，ヒューム，カントら）および第三の「直接知」（ヤコービら）ととらえ，それらを詳しく紹介するとともにヘーゲルの評価を加えている[(16)]。そしてヘーゲルは「論理学講義」において，ここで問題となる「思考と存在との対立」とその「統一」が，「私たちの時代の関心が取り組んでいる，哲学の大問題」[(17)]であると言い，それに対するヘーゲル自身の立場を明瞭に打ち出すのである。

エンゲルスは『小論理学』は読んでいたが，ヘーゲル「論理学講義」の筆記録は個人の所蔵であったため読むことができなかった。しかしエンゲルスの「大きな根本問題」という表現は，ヘーゲルの「大問題」という表現に近いものである。また，ヘーゲルの『哲学史講義』は彼の死後に出版された『ヘーゲル全集』に含まれており，エンゲルスが読んでいることは確かである。「思考と存在」というヘーゲルの用語をエンゲルスも「哲学の根本問題」の定式で用いているのである。

以上のように，プラトンやヘーゲルをふり返っても，エンゲルスの「哲学の根本問題」の定式は哲学史を正当にとらえるものなのである。

(3)　哲学の根本問題の時代的背景

「哲学の根本問題」の定式への批判として，それは哲学の超歴史的な把握であって，人間が生きる

---

(14) プラトン「ソピステス」藤沢令夫訳，『プラトン全集』第 3 巻，岩波書店，94–95 頁，参照。
(15) 『ヘーゲル全集：哲学史　下巻の 2』藤田健治訳，岩波書店，6–8 頁。
(16) ヘーゲル『小論理学』松村一人訳，岩波文庫，参照。
(17) 『G.W.F. ヘーゲル論理学講義ベルリン大学 1831 年』牧野広義・上田浩・伊藤信也訳，文理閣，24 頁。

現実の社会状況を捨象した議論であるというものがある。

しかし，エンゲルスが原始宗教から一神教へと至る宗教の歴史を語るとき，そこでは原始共同体から古代社会における民族の対立や，諸民族を統合する古代国家の成立などの現実の時代背景を前提としている。またエンゲルスが「ヨーロッパの人間がキリスト教の中世の長い冬眠から覚めたとき」,「存在に対する思考の問題」が鋭く提起されたと言うとき，近代ヨーロッパの形成という時代背景を明示している。

この点で，上記の哲学史の現実の時代背景も確認しておきたい。古代ギリシアのタレスが活躍したミレトスはギリシアの植民都市であり，港や市場や広場があり地中海貿易の商取引などで栄えた。タレスは自然研究で有名であり，彼は多様な自然の観測の中から,「万物の根源は水である」と主張したのである。そこには,「神話的世界観」を克服して「合理的世界観」としての哲学を唯物論的に提起する現実の背景があった。

また「原子論」を提唱したデモクリトスは，古代ギリシアの北方の都市アブデラの市民であり，広く各地を旅行し，多方面の研究を行い,「学問における 5 種競技者」と言われた。彼は「幸福は，金銭などによってではなく，正しい心構えと多くの知恵による」とか,「民主制における貧困は，専制王政のもとでのいわゆる幸福よりも好ましい」という言葉も残している。このような市民の現実的な感覚が唯物論と結びついたのである。

それに対して，観念論の代表であるプラトンは，古代ギリシアの盟主であるアテナイの貴族の出身であり，奴隷制を公然と擁護し，民主政治に対して批判的であり，哲学者が国家の統治者になるべきだと主張した。そして，観念論と唯物論との論争を「神々と巨人族との戦い」にたとえたように，観念論を洗練された神話であると考えたのである。

そして，ヨーロッパ中世では,「哲学は神学の下女」と言われたように，キリスト教の神学が学問を支配した。プラトンやアリストテレスの哲学はキリスト教神学のために利用され，唯物論は厳しく弾圧された。

近代哲学の背景を，ヘーゲルは「人間が自然を発見し，自己自身を発見した」ということに見る。それは，ヨーロッパ人がアメリカ大陸や世界航路を発見してその植民地化を行い，自然科学を発展させ，ルネサンスや宗教改革などを行ったことである。そしてヨーロッパでは資本主義が形成され，市民革命も行われた。これらが近代の唯物論と観念論の背景である。唯物論は，自然科学の発展や 17–18 世紀の市民革命とも結びついた。観念論は，近代的な人間の自立を背景にして，精神の発展をとらえる。そこから個人の意識（自我）が世界の根源であるとする主観的観念論も生まれた。ヘーゲルはこれらを踏まえて,「実在論的哲学」と「観念論的哲学」との対立をとらえたのである。そしてヘーゲル自身は,「理性への信頼」を訴えて青年たちを教育し，プロイセンの近代化に貢献しようとしたのである。

エンゲルスの時代も，資本主義社会の発展とその矛盾の中で，唯物論と観念論との論争が展開さ

れていた。「哲学の根本問題」はこのような社会的・歴史的背景をもつ理論問題として問われてきたのである。このことは現代でも同様である。

(4) マルクスにおける唯物論と観念論

エンゲルスはまた，マルクスによる唯物論と観念論との対立の把握からも学んでいる。マルクスは，上記のように，『聖家族』における「フランス唯物論にたいする批判的戦闘」の中で，唯物論と形而上学（観念論）との闘争を論じた。そこでは，18 世紀のフランス唯物論は 17 世紀の形而上学とすべての形而上学にたいする闘争であったが，18–19 世紀のドイツの思弁哲学は形而上学を復活させたとされる（MEW, Bd. 2, S. 132.『全集』第 2 巻 130 頁）。とりわけ「ヘーゲルがその天才的な仕方で，それまでのあらゆる形而上学とドイツ観念論とを合一して，形而上学的な普遍的世界を建設した」（同）。しかしヘーゲルの後に，「思弁的形而上学およびあらゆる形而上学への攻撃が起こった」（同）。その「理論」における代表はフォイエルバッハの「人間主義と一致する唯物論」であり，「フランスとイギリスの社会主義と共産主義は，実践の領域でこの唯物論を代表した」（S. 132. 130–131 頁）。マルクスはこのような概観を述べたうえで，フランス唯物論とイギリス唯物論についてより詳しく論じたのである。エンゲルスによる「とくに近代の哲学の大きな根本問題」という定式は，このようなマルクスの議論も踏まえたものである。

またマルクスは『資本論』第二版への「あとがき」において，ヘーゲルの弁証法と自分の弁証法との違いを次のように述べた。

「私の弁証法的方法は，ヘーゲルのそれとは根本的に（der Grundlage nach）異なっているばかりでなく，それとは正反対のものである。ヘーゲルにとっては，彼が理念（Idee）の名のもとに一つの自立的な主体に転化しさえした思考過程が，現実的なものの制作神（Demiurg）であって，現実的なものはただその外的現象にすぎない。私にとっては反対に，観念的なものは，人間の頭脳の中で置き換えられ，翻訳された物質的なものにほかならない」（MEW, Bd. 23, S. 27. 第 1 分冊 28 頁）。

ここでマルクスのヘーゲル批判は，ヘーゲルが『大論理学』において彼の論理学を「自然と有限精神の創造以前の永遠の本質の中にある，神の叙述」（上巻の 1, 34 頁）と表現したことに対応する。もともと人間の思考過程である論理を「理念」（イデー）という自立的な「主体」としてとらえ，それが世界を創造する神としてとらえること，ここにヘーゲルの観念論がある。それは，プラトンの「イデア」論や，宇宙の創造説を受け継ぐものであることを，マルクスはプラトンの「制作神（デミウルゴス）」という言葉を使うことによって示唆している。これに対してマルクスの弁証法は，「観念的なもの」は「物質的なもの」が人間の頭脳に翻訳されたものであるという唯物論の立場を基礎にする。こうして，ヘーゲルの弁証法とマルクスの弁証法とは，観念論か唯物論かという点で「根本的に」異なるのであり，正反対なのである。

この議論からもエンゲルスは学んでいる。「哲学の根本問題」における唯物論と観念論との対立に

ついて，マルクスとエンゲルスとは共通の認識をもっていたと言えるのである。

また，以上のように，「哲学の根本問題」が現実の時代背景をもちながら，哲学史を貫いて理論的に論争されてきたことを把握することは，哲学そのものの理解にとって重要である。すなわち，哲学とはそもそも「知恵の探求（ピロソピア）」である。「探求」とは決して超歴史的な真理を独断的に論じることではない。唯物論も観念論も時代の思想的課題と取り組み，その相互の批判や論争をとおして歴史的に発展してきたのである。その意味で，エンゲルスの「哲学の根本問題」を超歴史的な図式として理解することは，エンゲルスの精神も哲学そのものをも歪曲することになるであろう。

(5)　人間は現実の世界を認識できるか

エンゲルスはまた，「哲学の根本問題」のもう一つの側面として，現実世界の認識可能性の問題を取りあげている。それは，「われわれの思考は現実の世界を認識することができるか」（S. 275. 33 頁）という問題である。

唯物論者は，経験と理論をもとにして世界は認識できると主張する。ヘーゲルのような観念論者も「思考と存在の同一性」を主張する。つまり，ヘーゲルは「絶対理念」によって自然も人間も創造されたものであるから，「絶対理念」の認識によって世界の本質が認識できると主張する。

他方で，イギリスのヒュームやドイツのカントらは，これに反対した。ヒュームは，人間にとっては感覚の「印象」だけが確実であって，感覚が示す物の存在も本質も知りえないと主張した。カントは，「物自体」は存在し，人間の感覚を触発するが，しかし「物」の認識は人間の感性と悟性によって構成された「現象」であり，「物自体」は認識しえないと主張した。

またエンゲルスはイギリスの「不可知論者たち」をあげている。その立場は，「唯物論をこっそりと受け入れながら，人前では否認するという，はにかみ屋のやり方」（S. 276. 36 頁）だとされる。ここでは「不可知論」という言葉を作ったトマス・ハクスリーが念頭に置かれていると思われる。ハクスリーは科学者であり，経験を超えたものは「不可知」だと主張した。同時に彼は，ダーウィンの進化論を擁護して，「ダーウィンのブルドッグ」と自称した。このような科学者を念頭に置いて，エンゲルスは「不可知論」は「はにかみ屋の唯物論」だと言ったのである。

しかし，エンゲルスの言う「はにかみ屋の唯物論」はヒュームやカントの不可知論には当てはまらない。ヒュームの議論からは，物質の存在は不可知であるから，感覚に与えられた印象のみが存在することになり，それが実証主義的な観念論に結びついた。また，カントは『純粋理性批判』第二版「序文」で「私は信仰に余地を与えるために，知識を除去しなければならなかった」[18]と述べた。つまり，経験的認識では「物自体」は不可知であるとすることによって，現象を超えた神の存在や霊魂を信仰できると考えたのである。

（18）カント『純粋理性批判』高峯一愚訳，河出書房新社，36 頁。

では不可知論はどのようにして克服することができるのか。エンゲルスは，不可知論に対するもっとも痛烈な反駁は「実践，すなわち実験と産業である」（S. 276. 35 頁）と言う。たとえば，19 世紀ドイツの化学者は，アカネ草の色素アリザリンの分子構造を明らかにして，それをコールタールから人工的に合成した。これによってドイツの化学産業は大きく発展したのである。また，フランスの天文学者は，ニュートンの万有引力の法則をもとにして，天王星のかなたにある未知の惑星の存在を予測した。それがドイツの天文学者によって予測どおりに発見された。これが海王星の発見である。つまり，実験や観察による実践が理論の真理性を証明するのであり，産業はそれを日々検証しているのである。

真理の認識と検証をめぐる問題は，エンゲルスが『フォイエルバッハ論』の付録として公表したマルクスの「フォイエルバッハにかんするテーゼ」の「第 2 テーゼ」でも明瞭に述べられている。「人間の思考に対象的真理が与えられるかどうかの問題は，理論の問題ではなく，実践の問題である」（MEGA, VI–3, 20. 110 頁）。

エンゲルスは自然科学や産業の例をあげているが，社会についての認識の場合も同様である。経済理論や政治理論などの真理性も，人間が行っている経済活動や政治活動の実践によって，それらの理論の真理性が検証されるのである。この問題は「哲学の根本問題」の第二の側面として重要な意味をもつのである。

(6)　存在論的問題と認識論的問題

なお，ここで「哲学の根本問題」の第一の側面と第二の側面の性格について触れておきたい。第一の側面は，物質と精神の根源性や歴史先行性に関わる存在論的問題，あるいは世界の根源を問う世界観的問題であり，第二の側面は対象とその認識に関わる認識論的問題であるという解釈がされることもある。

しかしながら，第一の根源性の問題は，物質と精神のどちらが根源かという問題や，歴史的先行性に関わる問題だけではない。それは，意識から独立した実在を承認するかどうかという，認識の場面における根源性の問題でもある。つまりそれは，存在論（世界観）的問題であると同時に認識論的問題でもある。とりわけ近代哲学においては，意識から独立した実在を承認するかどうかが重要な論点になったのである。ヘーゲルもその点を考慮して，「実在論的哲学」という表現をとっていた。また，先に見たマルクスのヘーゲル観念論批判における唯物論の主張は，「観念的なもの」とは「物質的なもの」を意識に翻訳したもの（マルクスの別の表現では「反映」したもの）として，認識論的に論じられている。こうして，第一の側面は，とくに近代哲学を念頭に置けば，認識論的問題を中核にした存在論（世界観）的問題であると言うことができる。そして，認識論的に客観的実在を承認することから出発して，地球上の生命の進化から意識をもった人間が誕生したことや，人間の身体の一部である脳の活動から意識が成立するという，存在論的主張もできるのである。

それに対して第二の側面は，認識論の一部をなす世界の認識可能性の問題である。しかもここでは真理の検証の問題として，認識と実践との関係が問われるのである。

(7) 唯物論の批判的精神

先に，「哲学の根本問題」が唯物論と観念論との相互の批判と論争に関わる問題であることを見た。この点で，エンゲルスは，マルクスとエンゲルスがヘーゲル観念論から脱却したことを語りながら，唯物論の批判的精神を大変明瞭に述べている。

「われわれは現実の世界――自然と歴史――を，先入見となっている観念論的幻想なしに近づくどの人間にも現れるがままの姿でとらえようと決心したのである。空想的連関においてではなく，それ自身の連関において把握された事実と一致しないような，どのような観念論的幻想をも容赦なく犠牲にしようと決心したのである。そして，唯物論とは，そもそもこれ以上の意味をもっていない」(S. 292. 69 頁)。

ここでエンゲルスは，観念論的な幻想を批判して，自然と社会の現実をありのままにとらえる思想が唯物論であることを述べている。人間は常に意識をもって行動する。しかし幻想や空想では現実の生活は成り立ちえない。人間はまず現実をありのままにとらえることが必要である。しかし人間は，しばしば先入見や願望にとらわれて，現実を見誤る。それは専門の科学者でも同様である。人間が現実をありのままに見ることは容易ではない。その点で，批判的精神をもって意識的に唯物論を貫くことが必要なのである。

また，唯物論は，人間の幸福を現実の世界の中で追求する。それに対して観念論は，現実世界の問題を「心の問題」にしたり，人間の幸福の問題を「心がけ」の問題にしたりすることもある。この点で，エンゲルスは，フォイエルバッハが「汝ら，たがいに愛せよ」という愛の道徳を説くだけに終わったことも批判した。フォイエルバッハには，現実社会の中で現実を変革する仕方で人間の幸福を実現するという視点がない。この点をエンゲルスは批判したのである。

こうして，エンゲルスの「哲学の根本問題」の定式は，存在論（世界観）としても，認識論としても，また現実批判や倫理学の展開においても，重要な意味をもつのである。

(8) 残された課題

以上のように，エンゲルスの「哲学の根本問題」の定式は重要な意味をもつ。しかし，『フォイエルバッハ論』がもともとは書評として書かれたコンパクトな著作であったこともあり，残された課題もある。その一つはマルクスの「新しい唯物論」の扱いである。

マルクスの「フォイエルバッハにかんするテーゼ」は『フォイエルバッハ論』の「付録」として公表されたが，そこで提示されている「新しい唯物論」が詳しく紹介されることはなかった。またエンゲルスがマルクスと共同で執筆した『ドイツ・イデオロギー』が出版不可能であった事情のた

めに，彼らが「実践的唯物論者すなわち共産主義者」の立場から行ったフォイエルバッハ批判の部分も，エンゲルスの生存中には日の目を見ることがなかった。

しかし，本稿の最初に取りあげたように，「フォイエルバッハ」章でのフォイエルバッハ批判は，マルクスの難解な「第 1 テーゼ」の内容を平明に叙述したものである。またフォイエルバッハ批判と唯物論的歴史観とのつながりも明らかである。未完成であっても「フォイエルバッハ」章の主要部分だけでも出版されていれば，マルクスの「新しい唯物論」の理解が早期に広まったと思われる。

マルクスの「新しい唯物論」は，現実の世界を人間の労働と社会的実践との関わりでとらえるものである。それは，現実世界の「観察」だけにとどまった古い唯物論を批判して，唯物論そのものを発展させ，「世界の変革」の哲学を提唱するものであった。そしてこの現実の実践的把握と世界の変革の精神が，労働と階級闘争の発展から社会の発展をとらえる唯物論的歴史観につながった。またそれは現実世界の矛盾の把握を核心とする唯物論的な弁証法とも不可分なものであった。

エンゲルスはマルクスの弁証法や唯物論的歴史観と共通の認識をもち，それを平明に論じた。しかしマルクスの「新しい唯物論」における現実世界を「実践として主体的にとらえる」ことを，唯物論そのものの新しい発展段階として論じることはなかった。それは，エンゲルスがヘーゲル論理学の概念論における「主体」の論理や「主体－客体」弁証法などを取りあげなかったこととも関係するであろう。

以上の点で，マルクス主義哲学へのエンゲルスの貢献を踏まえながらも，今日の時点でマルクス主義哲学とは何かを改めて検討することが課題として残されていると思われる。また本稿では，現実的世界の実践的把握，弁証法，および「哲学の根本問題」の定式におけるエンゲルスの貢献について論じたが，唯物論的歴史観へのエンゲルスの貢献（『家族・私有財産・国家の起源』など）を取りあげることができなかった。この点も今後の課題としたい。

参　考　文　献

Engels, Friedrich, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft,* in: *Marx / Engels, Werke* (*MEW*), Bd.19, Dietz Verlag, 1962. エンゲルス『空想から科学へ』石田精一訳，新日本出版社，1999 年。

————*Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutsche Philosphie*, in: *MEW*, Bd.21. Dietz Verlag,1962. エンゲルス『フォイエルバッハ論』森宏一訳，新日本出版社，1998 年。

————*Die Dialektik der Natur,* in: *MEW*, Bd.20. Dietz Verlag,1962. エンゲルス「自然の弁証法」『マルクス・エンゲルス全集』第 20 巻，大月書店，1968 年。

————Brief an Johann Philipp Becker, 15.Oktober 1884, in: *MEW*, Bd.36, Dietz Verlag, 1967.「エンゲルスからヨハン・フィリップ・ベッカーへ」1884 年 10 月 15 日付，『マルクス＝エンゲルス全集』第 36 巻，大月書店，1975 年。

Feuerbach, Ludwich, *Grundsätze der Philosophie der Zukunft*, in: Ludwich Feuerbach, *Sämtliche Werke*, Bd. Ⅱ. Hrsg. von Wilhelm Bolin und Friedrich Lodl, Fromann Verlag, 1959. フォイエル

バッハ『将来の哲学の根本命題』松村一人・和田楽訳，岩波文庫，1967 年。
Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik*, Ⅱ,in: G.W.F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden* Bd.6, Suhrkamp Verlag, 1969. ヘーゲル『大論理学』中巻，武市健人訳，岩波書店，1960 年。
————*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830). Erster Teil Die Wissenschaft der Logik,* in: G.W.F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden* Bd.8. Suhrkamp Verlag, 1970. ヘーゲル『小論理学』松村一人訳，岩波文庫，1951 年。
————*Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie* III *,* in: G.W.F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden* Bd.20. Suhrkamp Verlag, 1971.『ヘーゲル全集：哲学史　下巻の 2』藤田健治訳，岩波書店，1956 年。
————*Vorlesungen über die Logik, Berlin 1831.* Nachgeschrieben von Karl Hegel. Hrsg.von U. Rameil, unter Mitarbeit von H.-C. Lucas, Felix Meiner Verlag, 2001.『G.W.F. ヘーゲル論理学講義ベルリン大学 1831 年』牧野広義・上田浩・伊藤信也訳，文理閣，2010 年。
Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft,* hrsg. von R. Schmidt, Philosophische Bibliotek, Felix Meiner, 1956. カント『純粋理性批判』（世界の大思想　第 10 巻）高峯一愚訳，河出書房新社，1965 年。
Marx, Karl, *Das Kapital Erster Band*, in: *MEW*, Bd.23, 1962. マルクス『資本論』資本論翻訳委員会訳，新書版，新日本出版社，1982 年。
———— ad Feuerbach [These über Feuerbach], in: *Marx / Engels, Gesamtausgabe* (*MEGA*), IV.Abt., Bd.5, De Gruyter, Akademie Forschung, 1998. *MEW*, Bd.3, Dietz Verlag, 1969. マルクス「フォイエルバッハにかんするテーゼ」，マルクス／エンゲルス『［新訳］ドイツ・イデオロギー』服部文男監訳，新日本出版社，1996 年，所収。
Marx / Engels, *Deutsche Ideologie*, in: *MEGA*, I. Abt., Bd.5, De Gruyter, Akademie Forschung, 2017. マルクス／エンゲルス『［新訳］ドイツ・イデオロギー』服部文男監訳，新日本出版社。
————*Die heilige Familie*, in: *MEW*, Bd.2, Dietz Verlag, 1957. マルクス／エンゲルス「聖家族，別名批判的批判の批判．ブルーノ・バウアーとその伴侶を駁す」『マルクス＝エンゲルス全集』第 2 巻，大月書店，1960 年。
大村泉・窪俊一・V. フォミチョフ・R. ヘッカー編『ポートレートで読むマルクス——写真帖と告白帖にみるカール・マルクスとその家族——』極東書店，2005 年。[Omura, Izumi / Kubo, Syunichi / Fomicev, V. / Hecker, R. eds., *Portrait de yomu Marx: Shasincho to Kokuhakucho ni miru Karl Marx to sono Kazoku*, Kyokuto Shoten, 2005]
Plato, *Sophist* in: Plato, *Theatetus; Sophist*, translated by H.N. Fowler, The Loeb classical library, Harvard University Press, 1921. プラトン「ソピステス」藤沢令夫訳，『プラトン全集』第 3 巻，岩波書店，1976 年。
田畑稔「エンゲルスによる『哲学の根本問題』導入の経緯」田畑稔『マルクスと哲学』新泉社，2004 年，所収。[Tabata, Minoru,“Engels ni yoru “Tetsugaku no Komponmondai’ Donyu no Keii”, *Marx to Tetsugaku*, Sinsensya, 2004.]

要旨: マルクス主義哲学におけるエンゲルスの貢献を本稿では次の 3 点から論じる。第 1 に，マルクスの「新しい唯物論」が『ドイツ・イデオロギー』におけるエンゲルスとの協働によって平明に主張された。第 2 に，エンゲルスは弁証法をヨーロッパ思想の歴史的発展からとらえ，分析的方法やヘーゲル弁証法の意義と限界も位置づけた。第 3 に，エンゲルスは哲学史を踏まえ，マルクスの認識とも共通する「哲学の根本問題」を明快に定式化した。

キーワード: 現実世界の実践的把握，弁証法，唯物論，矛盾，哲学の根本問題